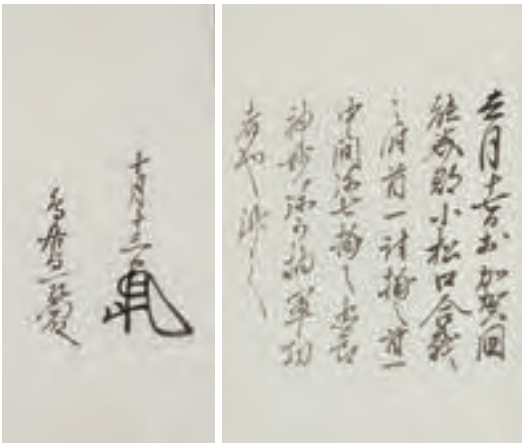


# 越前朝倉氏と南加賀の攻防

戦国時代の当市域を含む南加賀は隣国越前の守護朝倉氏の侵攻にしばしば悩まされた。永正三年（一五〇六）の北陸における一向一揆の一齐蜂起に際し、能美・江沼両郡の本願寺門徒を中心とする加賀の一揆勢が、越前の真宗の大



(永禄3年) 10月13日付朝倉義景感状写(金沢市立玉川図書館所蔵)

坊主を支援するため九頭竜河畔にまで攻め入った。しかし朝倉氏はこれを撃退し、越前・加賀国境の海陸に関所を設け、北陸道の往来を一時遮断した。

享禄四年（一五三二）、加賀国で一向一揆体制の主導権をめぐり、本願寺一家衆の「加州三カ寺（松岡寺・光教寺・本泉寺）」と越前から同国に亡命していた藤島超勝寺・和田本覚寺の間で抗争が起こった。このとき朝倉氏は、江沼郡山田の光教寺頭誓に合力を申し入れ、同年九月、一族の朝倉教景（宗滴）を大将として、三カ寺派救援のため南加賀に軍勢を進め、能美郡本折（現小松市市街地）に陣を布いた。

教景軍は、十月二十六日、本折を發つて手取川を超え、石川郡に攻め入ったが、やがて戦局の変化により、陣を



『賀越関諍記』巻1 朝倉教景賀州進發之事伝々（「本折へ陣替ソアリケル」の記事）(金沢市立玉川図書館所蔵)



朝倉義景画像(心月寺所蔵/福井県教育委員会提供)

撤して越前に帰った。朝倉軍が加賀に出陣した背景には、加州三カ寺が、当時越前朝倉・能登畠山氏などの北陸守護勢力と友好関係にあり、殊に能美郡波佐谷の松岡寺蓮網しんごうと朝倉氏は、数年来親しい間柄という事情があった。

松岡寺一族は、このとき超勝寺に同心した山内衆に捕らえられて白山麓に幽閉され、ほどなく蓮網は病没し、その子息たちは自害して果てた。

弘治元年(一五五五)七月、戦国大名朝倉義景よしかげは、長年にわたる加賀一向一揆との抗争に決着をつけるべく、一門の長老宗滴を大将に、軍勢を江沼郡に侵攻をさせ、一揆方の大聖寺・日屋城を落した。しかし宗滴が陣中で病氣になったため、同年八月、同郡敷地付近を占拠したまま越前に帰陣する。

だが郡内の各地で以後も朝倉・一揆方双方の戦闘は続いており、九月中旬には、同月八日に一乗谷で逝去した宗滴に代わって、朝倉軍の大将となった朝倉景隆かげたかが、江沼郡の那谷・粟津あわづに進撃し、各所を放火したが、一揆勢の抵抗はみられなかった。ついで十月になると、朝倉方の山崎吉家やまざきよしいえの手勢が、能美郡安宅あたくに攻め入って放火し、周辺部を占拠した。だが翌二年春に至り、將軍足利義輝の調停で、朝倉氏と一向一揆の間に和談が成立し、朝倉景隆勢は加賀から退去して越前に帰った。

その後、永祿七年(一五六四)に、朝倉勢の侵攻がみられ、九月十七日には、加賀に下向していた本願寺内衆うちしゅう下間頼良しもつまつりりょうの率いる一揆軍と朝倉勢が、能美郡の本折・小松や江沼郡の鵜谷口

などで激戦を展開し、朝倉方の鳥居とりい一左衛門尉いちざえもんじょうらが戦功を上げ、越前に帰国後、義景から感状かんじょうを得ていた。さらに翌八年四月十六日にも、朝倉勢が南加賀の本折・小松・片山津に陣を布いたが、加賀の一向一揆方は、動橋どうばし・御幸塚みゆきづかで朝倉方の兵糧を奪い取るなど攻勢に転じたため、同月二十四日、越前に帰った。

(東四柳史明)



朝倉軍に攻められ放火された那谷寺の周辺 右上部に那谷城があった。